



加賀の北前船主がつくった倉庫が3棟並ぶ。小樽運河の北端に位置していることがわかる。



正面左右の端の窓。上部の軟石がアーチ状になっている。



復元された屋根瓦。



正面右手の扉の上部は台形型に軟石が積まれている。



右隣の旧広海倉庫とは奥でつながっている。正面右手の入口付近。



正面左側の入口。上部のアーチ型の装飾が印象的。



正面右側の扉。軟石が補修されている。



建物裏側。手前から旧増田倉庫、旧広海倉庫、旧右近倉庫。



裏側の扉。上部は台形状に軟石が積まれている。

旧増田倉庫

(小樽市色内3丁目10-19)

明治36年に建築。木骨石造2階建。簡素な外観ながら、三角形の切妻屋根、中央付近に相対する垂直の束を持つ洋風の対束小屋組(クイーンポストラス)が特徴となっている。平成3年、小樽市指定歴史的建造物に指定。「舶来屋おたる運河市場」などに利用されていたが同7年には空き家となり、その後、北一硝子の関連会社の所有となる。同9年、大規模な改修工事が行われた。



きゅうます だ そう こ
旧増田倉庫 (北一硝子倉庫)
きたいちがらすそうこ

加賀橋立のトップ3と言われた北前船主・増田家がつくった倉庫

北運河エリアにある加賀の北前船主がつくった倉庫は3棟並んで現存しており、全国的にも極めて珍しい。3棟すべてが北前船日本遺産の構成文化財に認定されているが、最も南側にある旧増田倉庫は、やや小さく、解説板でもほとんど情報がないため、地味な印象を受けるかもしれない。

実は、増田家は北前船主を多数輩出した橋立(現・石川県加賀市)でトップ3と言われたこともある大船主で、橋立に現存する邸宅の高さ4m以上の巨大な石垣は北前船主の威勢を象徴する建物として名高い。増田家の資料は、平成4(1992)年に1万点以上、同10年には約4500点の資料が同家から加賀市に寄託された。最近も多数の資料が見つかり、少しずつ同家の北前船経営や、小樽の関わりなどが明らかにされている。

増田家の初代又七は近江から橋立へ移住し、越前国敦賀港の田之中与三右衛門の船に乗り、船頭となった。青森県深浦港で病にかかり亡くなったが、北前船に関わりのある各地を往来していたことがわかる。2代目又七(1748・1827)は、幼い頃に大火で家財道具を失い、孤児として橋立の親戚で養われていた。成長した又七は、敦賀港の加賀屋と船を共同所有し船長を務めたが、幼い頃の貧しさを忘れず、俟約して通力丸を購入した。これが増田家の最

初の持ち船である。

3代目又右衛門(1782・1867)は、田之中家の船で船乗り修行を重ねた。通吉丸を大船に造り替え、さらに通吉丸、通幸丸を新造。3艘で増田家の財産を何倍にも増やし、中興の祖と言われた。4代目又右衛門(1825・1906)の頃、安政元(1854)年に青銅六貫目筒「門」を大聖寺藩に献上した功績により「増田」の苗字を名乗るようになった。明治10年代には持ち船8艘で増田家史上最多となり、橋立で久保家、西出家に次ぐ3番手の地位を確立した。明治30年代には西洋型帆船を3艘所有するようになるが、増田家は最後まで汽船に移行することとはなかった。

増田家は明治期に小樽に支店を設置し、金子元三郎商店などと取引をしている。この倉庫は同36年に建てられた。増田家の水主(船員)は地元出身者が多いが、明治20年頃から北海道の寄港地で逃亡した水主が何人もいることは興味深い。同22年に函館で1名、同26年に岩内で4名、同27年に小樽で2名、礼文島で1名が逃亡したという記録がのこっている。増田家にとっては困ったことだろうが、加賀の船員たちが故郷を離れ、小樽などに新天地を求めたことからは、北海道の歴史の一端が垣間見える。

撮影・落合亮(小樽商科大学写真部)
文章・高野宏康(小樽商科大学学術研究員)

【参考文献】
「参事文庫」牧野隆信「北前船主増田又右衛門家文書略報」(文庫)36(1993)、「牧野隆信「増田又右衛門文書」(第12回北前船セミナー基調講演配布資料、1998)、「小樽の歴史的建造物」(1995)、「歴史的建造物の街小樽」(2011)、「堀井美里「加賀市橋立増田家文書について」第31回全国北前船セミナー報告レジュメ、2017年」